

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

今月のピックアップ

さいこ 柴胡

【性味】 苦・平、微寒

【薬効】 疏肝解鬱、理気、清熱透表、昇発清陽

サイコの成分・・・



生薬特有の薬能としては、上でも述べましたが、疏肝解鬱（そかんげうつ）と理気（りき）が主な作用で、抑うつ、緊張状態を緩解し自律神経の調整をして身体の機能を円滑にしたり、消炎解熱作用もあり、軽度の発汗作用も持つため、熱証の方によく用いられます。

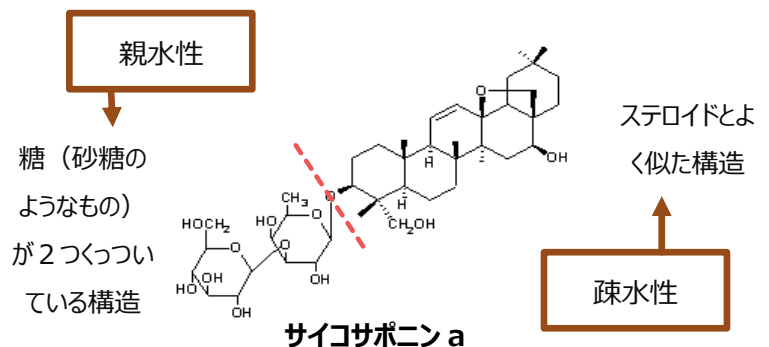
サイコとは・・・

ミシマサイコ : *Bupleurum falcatum* の根で、セリ科に分類されます。東アジア温帯地域から日本に分布し、日本では静岡～神奈川県に野生するものが良質とされ、その集散地にちなんで『**ミシマサイコ**』と呼ばれるようになりました。この学名は日本薬局方においてミシマサイコを代表するサイコ群を総称する名前となっています。



サイコの主成分は、サイコサポニン a、c、d、e、アセチルサイコサポニン類などです。このサポニンが**サイコ**の薬効を示す成分となります。

主な薬理作用としては、中枢抑制作用を有するため、鎮咳作用や解熱作用がみられます。また血清コルチコステロン量増加によるステロイド様作用、肝障害改善作用、胃潰瘍予防作用など多くの報告があります。



サイコサポニンは**サポニン**の一種で、前項の化学構造式を見ていただくと、親水性（水に溶けやすい性質）の部分と、疎水性（水に溶けにくい性質）の部分により成り立っていることが分かります。これは、一般的な洗剤に含まれる界面活性剤と構造が類似しており、このためサポニンを含む水溶液を少し振ると石鹼水のように泡立ちます。サイコや他の生薬にもサポニンは多く含まれているため、煎じた際の泡立ちがなかなか消えず石鹼みだと思われた方もいるかもしれませんが、まったくその通りなのです。シャボンと語源が同じなので響きが少し似ていますし、特性もよく似ているのですね。

サイコを含む方剤・・・

しょうさい こうとう

小柴胡湯（体力中等度の微熱悪心などあるものの急性熱性病、肺炎、感冒、慢性肝炎など）

ほちゅうえっ きとう

補中益気湯（元気がなく胃腸のはたらきが衰えているものの虚弱体質、疲労倦怠、病後の衰弱など）

よくかんさん

抑肝散（虚弱な体質で神経がたかぶりやすいものの神経症、不眠症、小児夜泣きなど、）

サイコの問題点・・・

サイコの問題点として挙げられるのが、栽培品と野生品の質に差が生じていることです。

まず、サイコの流通と栽培についてですが、昭和35年ころまでは和サイコとして野生品を集荷していましたが、昭和40年ころからその収穫量が激減し、またそれと同時に需要も激増したため、一時は韓国や中国から輸入されました。現在の流通品は、中国栽培もしくは日本栽培のミシマサイコ、もしくは中国産サイコが主流となっています。栽培については、通例2年を要していたサイコの栽培ですが、1年で収穫できる方法が開発されて以降、国内産のサイコも1年生が主になっています。この栽培品は成長早いため、根に含有する有効成分がそれに伴って増加するというわけではないため、栽培品のほとんどで有効成分が低く検出される傾向があります。栽培品を野生品同様に

使用すると期待した効果が得られない可能性も出てきてしまうので注意が必要です。



右の写真はそれぞれ日本以外の産地で採れたサイコです。栽培品は根は太くなりますが、木質が厚くなるため、根皮に含まれるサポニンの量が減少してしまいます。